

講座
現代詩史
日本

2
大正期

村野四郎
関良一
長谷川泉
原谷川子朗
編

右文書院

編 者 紹 介

村野四郎（むらの・しろう）

明治三四年一〇月東京都生まれ。慶
応義塾大学経済学部卒。東京教育大
学講師。現住所・東京都文京区千石
2-13 〒112

関 良一（せき・りょういち）

大正六年一二月東京都生まれ。東京
文理科大学国文科卒。専修大学教
授。現住所・東京都練馬区大泉学園
町2624 〒177

長谷川泉（はせがわ・いずみ）

大正七年二月千葉県生まれ。東京大
学国文学科卒。学習院大学講師。現
住所・東京都文京区西片1-1-11 〒
113

原 子朗（はら・しろう）

大正一三年二月長崎県生まれ。早稲
田大学文学部卒。立正女子大学教授
現住所・東京都練馬区練馬2-31-2
〒176

講座・日本現代詩史（全4巻）

第二巻 大正期

昭和48年12月10日 印 刷

昭和48年12月15日 発 行



編 著 者

村 野 四 郎

関 良 一

長 谷 川 泉

原 子 朗

発 行 者

三 武 達

発 行 所

右 文 書 院

〒101 東京都千代田区神田小川町 3-24
振替東京109838/電話03(292)0460

★落丁・乱丁本はお取り替えいたします。

臺灣印刷・三恵印刷・加藤製函・大和工業所

(分) 0392-(製) 731110-(出) 8614

は し が き

一般に、大正期の文化諸現象が、大正という元号にもとづく時代区分にしたがつて、特徴的に、主体的に論じられるようになったのは、比較的最近のことに属する。たいていは〈明治・大正〉といったふうに、明治に主体がおかれて、大正はその付随的な、おまけの時代であるかのようにして取扱われてきた。詩史もまた、そうであった。

研究が小刻みに精密になってきたから、というだけでなしに、かならずしも明治の連続としてのみ論じられない時代的特質を、大正期の文化が——ひいては大正期の詩も——もっているからにほかなるまい。

非連続の実体の究明なしに、歴史の連続は考えられない。

俗に〈谷間の時代〉〈陥没の時代〉などと、大正期という短い時代は形容されたりするけれども、いっそ、その形容は昭和の戦前、あるいは戦中の文化的衰微と暗黒の時期にこそふさわしいのであって、大正期は、それにくらべれば、むしろ輝やかしい、自由でまじめな〈芸術の時代〉、現代を先取りし、現代の原型を期せずして純粹なすがたで示している、ある意味では最も健康な時代、というふうにもいえるのである。

このたび右文書院のはからいで『講座日本現代詩史』全四巻が編まれ、こうして大正期の詩についての論考が一巻を占めることになった。明治の詩を継承し、また昭和の詩を先取りして示す、いそがしいこの時代の詩の状況を、諸家の御協力によって総合的に、読者諸賢とともに考える場所であると信じる。

論述される諸家の立場なり方法は、もとより自由であつて、拙稿をたとえていうのは諸家に対して失礼ではあるが、私のなどは許されると思われる範囲内で、はなはだ放埒に、大正期の詩について論じたつもりである。だが、それだけに、諸家の立場なり方法が自由であればあるだけ、綜合する領域は拡大されており、立体化の余地が用意されているともいえよう。諸論考を、ひとわたり拝見して、私はその感を深くした。

本書が、とくに大正期の詩の特質について、今後さらにくわしく論じられてゆくうえでの里程碑となることができる、幸である。

昭和四十八年十一月

原 子 朗

はしがき

第一講 大正期の詩

原 子朗

1	大正期の詩精神と散文精神	三
2	詩における〈大正期〉	三
3	大正詩の特質	六
4	亜口語詩の時代	三

第二講 自然主義文学と口語自由詩の成立

乙 骨 明 夫

1	詩壇の転機	四
2	口語自由詩の基盤の確立	六
3	口語自由詩の一時的衰退	六

第三講 大正詩史におけるヒューマニズム

安 藤 靖 彦

1	はじめに	三
2	『白樺』のヒューマニズム	五
3	高村光太郎	六
4	千家元麿・尾崎喜八・佐藤惣之助	一〇
5	宮沢賢治	一二
6	むすび	一三

第四講

「感情」詩派——現代詩の原点としての——

久保忠夫

1	『「感情」詩派』とは何か	一五
2	人魚詩社の成立	一六
3	朔太郎の関心をもった詩人達	一七
4	命名「人魚詩社」	一八
5	人魚詩社のはたじろし	一九
6	「卓上噴水」発刊	二〇

7	「卓上噴水」の意味―その系譜……………	一五
8	「卓上噴水」の執筆者たち……………	一五
9	「感情」創刊……………	一六
10	「二魂一体」と「一魂三体」……………	一七
11	「感情」と暮鳥……………	一七
12	「感情」詩派と高村光太郎……………	一七
13	朔太郎と拓次……………	一七
14	『月に吠える』『青猫』の影響……………	一八

第五講

「民衆」と民衆詩派

工藤信彦

1	民衆詩派の運動……………	一九
2	「民衆」素描……………	一九
3	「民衆」における民衆観……………	二〇
4	民衆詩派評価……………	二六

第六講 象徵詩・象徵主義の新展開

中島 洋一

- 1 系列化と白秋の象徵詩……………三三
- 2 露風の象徵詩……………三六
- 3 朔太郎の象徵詩……………三六
- 4 白秋系―拓次・惇夫などの象徵詩……………三三
- 5 露風系―八十などの象徵詩……………三七
- 6 白・露系以外―耿之介・朽葉・一穂・太郎などの象徵詩……………三五

第七講 近代詩における詩美の系譜

伊藤 康圓

- 1 "詩" 固有の領域とその純度……………三五
- 一 "語句のつながり"と"表示内容"……………三六
- 二 "詩" 固有の領域と象徵主義の理念……………三六
- 三 近代詩の純化の過程……………三七
- 2 芸術派の詩人たち……………三八

一	三富朽葉	二八〇
二	佐藤春夫	二八四
三	西条八十	二九三
四	堀口大学	三〇〇

第八講 アヴァンギャルド詩運動と大正詩の崩壊

— 未来派の詩的動態を中心に —

千葉 宣一

1	未来派の理念と本質	三〇九
2	日本における未来派の受容状況	三二五
3	『日本未来派宣言運動』の成立—思想と方法—	三三〇
4	発動国との国際交流	三四二
5	未来派の波動の諸相	三四五
6	未来派の命運と大正詩壇の解体—シュールレアリスムへの道—	三五三

第九講 フランス詩の投影と波及

窪田 般彌

第十講 大正詩論史

古川清彦

1	『牧羊神』とその影響	三九
2	『表象派の文学運動』と『珊瑚集』	三二
3	『月下の一群』	三三

1	はじめに	三三
2	象徴派の詩論	三四
3	口語自由詩論	四〇
4	民衆詩派詩論	四五
5	アヴァンギャルド詩論	四八
	付録	

大正詩誌解題

工藤信彦編

日本現代詩史年表

小川和佑編

第一講 大正期の詩

原

子朗

1 大正期の詩精神と散文精神

梶井基次郎の「檸檬」は大正十四年一月の「青空」創刊号に発表されたのだが、書かれたのは前年の大正十三年の十月である。

「えたいの知れない不吉な塊が私の心を始終庄へつけてゐた。」という書き出しのこの短篇は、詩的、結晶度の高い名篇として知られている。教科書などではあたかも古典のようにして取扱われている。

この冒頭の「えたいの知れない不吉な塊」は、「私」の蝕まれた肉体や、「背を焼くやうな借金」とは別の、「焦燥」や「嫌悪」に似たもののようである。そうして暗い心意をひきずって京都の町を放浪している「私」は、ある日、果物屋の店先で檸檬レモンを買う。鮮やかな檸檬の色とかたち、身内に浸みとおるような冷たさと香りが「不吉な塊」をいくらかゆるめ、不思議な重量感で「私」の心をみたす。やがて暗い内面を明るくして「何がさて私は幸福だった」。

そこから場面は結末のさわりの部分にかかる。「私」は檸檬を枕たもとに丸善に入つてゆく。「平常あんなに避けてゐた丸善が其の時の私には易やすと入れるやうに思へた」。ところが「私の心を充してゐた幸福な感情は段々逃げて行」き、「憂鬱が立て置めて来る」。好きな画集をいくらかめくつてみても、呪われたように「私は憂鬱になつて

しまつて、自分が抜いたまま積み重ねた本の群を眺めてゐる

ふと「私」は袂の檸檬を思い出し、ふたたび昂奮する。本を積みあげ、くずしては、また築きあげる。するとそれは「奇怪な幻想的な城」であつた。そして「城壁の頂きに恐る恐る檸檬を据えつけ」る。第二のアイディアがわいて「その奇妙なくらみは寧ろ私をぎよつとさせた」。「私」はそのまま丸善を出てゆく。

「丸善の棚へ黄金色に輝く恐ろしい爆弾を仕掛けて来た奇怪な悪漢」である「私」は、「十分後にはあの丸善が美術の棚を中心として大爆発を」起こし、「あの氣詰りな丸善」が粉葉みじんになるといふ幻想を熱心に追ひながら、「活動写真の看板画が奇体な趣きで街を彩つてゐる京極を下つて行つた」。

以上が「檸檬」の大筋である。

さて、大正期の詩を論じるのに、なぜ、いきなり私はこの「檸檬」を取りあげ、しかも周知の内容をいまさら紹介がましく要約したりしたのかというと、それにはそれなりの理由があつてのことである。この作品を読んでいて私はいろいろのことを思いつくが、それを主なものからならべてみて、その理由を明らかにし、あわせて大正詩概観のいとうちにしたいと思う。

先ず第一は、時代意識についてである。いわゆる「えたいの知れない不吉な塊」は、いうなればこの作品の核であり、同時に梶井作品の多くでくりかえし、ことばをかえて出沒するイメージでもあり、ライトモチーフであるといふことができる（ここは梶井論ではないから一々の例証は省略する）。それだけに、これは作者である梶井自身の傷つきやすい繊細な感受性の資質としてのみ受けとられやすい。たしかにそれは孤独な作者の心性にはちがいないが、同時に作品の文体によつて個性は普遍性を獲得していることを忘れてはなるまい。すぐれた作品

の文体は内部の外在化であると同時に、おのずから外部を内在化している。この作品の文学的価値もそこにあるのであって、単に作者の才能や感覚の個性的卓抜に帰せられるべきではないのだが、要するに「えたいの知れない不吉な塊」にしても、これは一時代の、つまりこの作品がくりかえし推敲され（いくつかの草稿をもち）、煮つめられて文体をもつに至った大正十三年時の、日本のインテリたちの内面構造を象徴するものにはかなるまい。「すぐれた詩人は、自分を書くことで、時代を書く」（エリオット）。

大正十三年といえば、関東大震災（大十二・九）の翌年である。大正七年の第一次大戦終結を機に日本の資本主義が空前の膨張をきたし、そうした社会的・経済的状况を背景に一つの頂点をむかえていた消費的な、リベラルな大正期の文化が、大震災をきっかけに急速に崩壊のきざしを見せ、いわゆる文化的な教養主義や人格主義が分裂の様相を呈していた時期、それが大正十三年以降の一種の世紀末的状况であった。独占体制を強化する経済界を反映して不況は慢性化し、そこからアナキズムにとってかわってマルクシズムが社会運動の主導権をにぎることになる。それがプロレタリア文化を一大勢力として生み出すにいたる。つづいてモダニズムの新興芸術運動がさまざまなかたちで大戦後のヨーロッパから直輸入されてくる。——こうした文化現象は昭和の初期までつづくわけで、その意味では大正十三年の時点は、文化史的にはもはや昭和期に入っているという見方も成りたつ。つまり〈近代〉をそれ以前の、おおむね大震災までとし、それ以後を〈現代〉とする見方である。しかしまた、それだけに大正十三年時の時代思潮なり時代意識は、ひるがえって上述のような第一次大戦以降を絶頂期とする大正期文化の特質の重要な転回点であり、複雑な帰結点ということもできるわけである。

「檸檬」はまさにそうした時代意識の産物にはかならない。「不吉な塊」は個人的事情をこえた大正期後半の

知識人の病巣であり、「えたいの知れない焦燥」なり「嫌悪」であった。その病巣のカタルシスを読者はこの童話的な詩的作品において味わう。一顆の檸檬が幻想的な擬似爆弾であるところが、いかにも時代のインテリの内面にふさわしく内閉的な行動力のなさをも暗示するが、もしこれが信管を抜いた実物の手榴弾であるとすれば、この作品のみか、どだい詩は存立し得ないのではないか、という〈実行と芸術〉の問題をも、この短篇は期せずして提起していることになる。その意味でもまた大正期にふさわしい作品といえよう。

それはともかくとして、こうした病巣を内面にもつインテリ人口の急増ということ、私はここでいっておきたい。これも大正期のデモクラチックな教育政策のあらわれだが、大正七年に文部省は〈高等学校令〉〈大学令〉を改正して、高等教育機関の拡充をはかった。ことに大学は帝国大学のほか、公私立の大学や、単科大学の設置をみとめたために、専門学校の昇格をふくめて大学の数は年を逐って急増する。既存の大学も学部・学科を増設し、たとえば文学部のような文化産業以外では直接役に立たぬ人材を養成する学部が、これまで国漢科あるいは英文科一本槍であったのを拡充して、それぞれ独・仏等の外国文学の専攻科を新たに設けるといふふうであった。これは明治いらい欧米の文化はすべて英語・英学の窓口を介して輸入されていたのが、大正期になってその窓口をとおさず、それぞれ直輸入・直接訳されるようになる趨勢に見合うものであった。

その全国に急増した高等教育機関を出た青白きインテリたちが、ただでさえ不況の巷に、彼らみずからその不況をあおるために、あふれ出すのは、学制改革から三年後と見ても、大正十年代からということになる。「大学は出たけれど」という高田稔主演の映画（松竹蒲田作品）がヒットするのは昭和四年だが、「檸檬」の書かれる大正十三年ごろは、すでに「えたいの知れない不吉な塊」を抱いて、實際行動にも参加できないインテリたちが、